

総務、産業、建設常任委員会記録

招 集 年 月 日	平成28年12月19日(月)
招 集 の 場 所	議員控室
開 会	午後1時30分
出 席 者	委員長 我妻 薫 副委員長 山岸 三男 委員 千葉 一男 委員 藤田 洋一 委員 櫻井 功紀 委員 鈴木 宏通 委員 前原 吉宏 議長 吉田 眞悦
欠 席 者	
職務のため出席 した者の職氏名	議会事務局次長 佐藤俊幸
協 議 事 項	・農商工連携による活性化について
そ の 他	
閉 会	午後3時11分

2号様式 協議の経過

我妻委員長	大変ご苦労さまでございます。 今年最後の常任委員会になろうかと思いますが、これまで重ねてきました農商工連携の活性化についてさらに深めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。 委員7名出席でありますので、常任委員会は成立しております。 前回を受けながら農商工連携の活性化について、さらに今後の取り組みを含めて検討を深めていきたいと思います。 あらかじめお伝えしたいと思いますが、さっきも言いましたけども今年最後になろうかと思います。あとは12月までということで進めてきたことは、12月までまとめることは難しいだろうということは前回、確認されていると思いますので。 議長とか特別委員長とちょっと意見交換していましたが、来年度についてもおそらく9月頃までに一定の目途を立ててないだろうと。新たな課題を設定するにしても。ま、そういうふうになれば、新たな設定というよりも、まだ私たちも課題の研究の途中なので、来年度に引き続き、この課題で検討を深めて来年度の9月頃のまとめに向けて継続していく方向でどうなのかなということで、教育民生常任委員会のほうとも意見交換をしています。 そんな感じで、ですから来年度も継続する形でより深めていくということに進めていってよろしいですかね。 (「はい」の声) ま、議長も来ていますけども。そういう方向で議長さんも、よろしくお願いします。 それでは、まだまだ町内の現状について深めていく必要があるんじゃないかということで前回、出されていまして、それに引き続き具体的にどのように進めたらよいのかご意見をいただきたいと思います。 前は高校とか渡辺採取場との意見交換も状況を把握するのに必要じゃないかとありまして、あるいは商工会との意見交換等も必要じゃないかと意見も出されていまして、それについてさらに具体的な討論をしていければと思います。 はい、副委員長。
山岸委員	一応、今年は農商工連携、それなりに生産者と商品販売している業者さん5、6社と話し合いをしてきました。 ただ、今後これから進めるときには委員長が言ったように、また議会報告会の中でも住民の方から言われたのは、「美里町には問屋さんが何軒

	かありますね、そういう方々からのアイデアとかそういうのも一回、話を聞いたほうがいいのではないか」ということも言われたんですけども。 前回の会議では農業者との意見交換会とか商工会との話し合いもと言うけど、これ同時に進めるわけには、ちょっと難しいかなと思うので。 例えば美里の問屋さんとの話し合いというか意見交換会みたいなのを最初にするのか、あるいは農業生産者関係の方との意見交換会をするのか、どちらか。同時進行も必要だろうと思うけども、その辺の進め方。商工業者あるいは問屋さんとの話し合い、意見交換。あるいは生産者とか同じ生産者でも6次産業的に商品も販売している人との意見交換会をするのか。 その辺も皆さんに協議してもらえればなと思うんですけども、いかがでしょうか。
我妻委員長	その辺、ですから具体的に。 問屋といってもどういう問屋さんとするのか。
山岸委員	ま、問屋さんと言え、今は大きく言えば乾物。瀬川本店さん、丸協さん、あと勝男商店の3店、商品問屋さんはあります。あとは酒問屋さんとしては齋林酒問屋さん1件。あと醤油工場、あそこは問屋さんというよりもまるきり生産工場。 （「生協にも卸しているんだな」の声） その辺をどのような、全部が全部やるわけにはいかないの、ある程度の絞らないといけないと思うので。 皆さんからご意見を。 （「鎌田醤油さん」の声） 鎌田醤油さんもそうだね、生産者だね。
我妻委員長	鎌田醤油さん、くみあい醤油さん。これも言ってみれば発酵業ですね。 ま、この前も出されていますけど、副委員長から前回は生産者のほうをやっているので、商業、流通のほうはその辺をどう考えているのかと。商工会との意見交換なども出されていましたけど。 前原さんからは商工会のほうに関わる農業者、生産者が少ないよということで、そのセッティングをどうするのかということも出されている。 前原委員。
前原委員	実は先週の金曜日ですけども商工会がらみで商業者と工業者が集まる研修会があったんですね。そこで講師として呼んだ七十七銀行の渉外担当の人が、6次産業とは言うものの、なかなか現状はという話になりまして、経済情勢。それで県の経済、遠田郡の経済情勢の話になって、やっぱり言うのはマッチングという言葉が出てきて。 銀行が言うマッチングというのは我々が使っているマッチングと違いま

	して、要は経済活動の盛んなところ、または上向きになっている業種というのが、どうやって販売力を作っているかということ、やっぱりマッチングをうまく作ると。それはどこを向いているかということ、やっぱり売れるところを向いているのが当たり前でしょうと。 なので、町内同士というのがなかなか難しいらしいんです、現状としては。やっぱり酒屋さんにしろ醤油屋さんにしろ、やっぱり地元じゃなくて町外的な部分のマッチングを求めて銀行が紹介していますという話をしていました。 終わってから懇親会がありまして、その中で「町内ではどうなんでしょうね」という話をしたならば、「やってみてもいいでしょうけれど、なかなか難しいですね」という意見をいただきました。
我妻委員長	売れるところを向いているとなれば、小島の味噌工房も同じ。あるいは川敬さんもしかり。 確かに企業経営から言えばやっぱり売れるところに目が向いている。なかなか町内に向かない。町内に購買力が少ないと。裏返して言ってみれば、そういうふうに言えるのかなと。
前原委員	「でも、いいところありますよね」と銀行さんに言われました。 涌谷の七十七銀行の支店長さんも同席していたんですけども、美里はいいですよと。え、なんでですかと言ったら、ハニーローズすごいですよねと言うんです。どうしてですかと言ったら、「あそこで去年のバラフェスに家族で行きまして、すごく盛況でしたよ。あれはすごいですよ。ああいうのを地元でもっとやったら」と言うんですよ。で、「やっているんですよ、来ている人間は地元よりも周辺のほうが多いので地元の特化してやる事業じゃないですよ」と言ったら、確かに消費人口から考えたら地元同士でくっつくのはいいですけども、向くのはやっぱり表ですねという結論になりました。
我妻委員長	それは現実の話だね。そこを踏まえながらどう産業活性化を考えていくのか。
前原委員	だから銀行で言うマッチングというのは結局、消費者を求めるのは表でいいから物売るにあたって、これとこれを組み合わせたらどうですかという結論だったんです。中で商売するというのは難しいでしょうかと。
我妻委員長	その視点はやっぱり外せない視点なので。そのためにどう農業と商業あるいは工業と。外にアピールするためにもね。
鈴木委員	前原さんが言うのはもちろんですし、例えば一次生産者である農業者に関して言えば、作るのが目いっぱい。ハニーローズさんもそのような話を

	されましたし。結局、販路に関しても例えば流通系はお任せするような形になるのが多いと思うんですよ。 その部分がなかなかできないので、一次産業で作っている私たちが商工業者の方々のいろんな知恵をいただきながら、販路の拡大にしても可能なのかなというところが多いと思うんです。 今までやっていた6次加工というのも、小島の方のように奥さんがあれだけの努力をなさって旦那さんと息子さんが生産者、一次産業に関わりながら奥さんが二次、三次加工、売り先も含めて一生懸命がんばっているというような役割分担でやるというのもなかなか大変ですし、そうかと言って、それで従業員を抱えてどうのこうのというのも、なかなか一般の生産者、農家の方々も取り組みにくいところもあります。 いろんな考えは一次産業をしている農家も持っていますけども、なかなかそれに踏み切れない、そしてまとめきれないというのが現状かと思えますので。 実際、本当に今の農家に限って言えば自分のテリトリーをやっているのが手一杯というところがありますので、その辺は十分、加味していただきたいところでもあります。 この間の陳情じゃないですけども、今度JAの改革とかいろいろ出ますし、ただ、全量買い取りとかの方向には向かないとは思いますが、その中でも自分たちで売るという努力をしている方が販路を拡大しているというか、それだけの意欲を持って市場調査をしながら開拓している。そして前原さんが言ったとおり、なかなか地元志向には。やっぱり都市圏、どうしても消費者の多いところに向いてしまうのが多いかと思えます。 バラのことをちょっと申し上げれば、山形もバラの産地で寒河江というところがあるんですが、あそこは駅のところにバラ風呂がありますし、バラの石鹸、バラの香料を使った化粧水、化粧品。そういうのもバラの産地として山形県は結構やっている。もう20年以上も前からしています。 南郷のバラ生産者の方々に聞くと、なかなかそこまで手が回らないし、市場で売ることが第一目標だということだね、この間もありましたけども、その力の置き方が、販路の持ち方とかやっぱりそこら辺も違うかなというところは感じます。 たぶんハニーローズの方々もそういうところはいっぱい見ていると思うんですよ。その中で敢えてしていないと言ったらいいんですか、できないというか、そういうところに至っているのかなと思います。
我妻委員長	農家の人たちも今言われたように米とか無農薬なんか含めてね、そういったものを直接、市場に。やっぱり首都圏なんだよね。

	だから農業者、生産者、やっている人はそういうふうに直接、販売。消費の団体なんかと連携を取りながらやっている。それが果たして美里町というブランドというか美里町の米はおいしいよとかいう形でなく、美里町の誰々さんの米ということになっているんだよね。 ハニーローズさんで言えば、町の花はバラだと言っているが、じゃ、本当に美里を代表するイメージで知られているのかと言うとまだまだ、そこにもっていない。 販売先を消費の量から言ったら、町内に求めるのは不十分だから外に向かざるを得ないけども、そういう一つの手段としては今、議論されている道の駅なんかも、あれは外の消費者を求めているということも言えるんでね。あとは、そのほかでは通販とか。
鈴木委員	あともう一点いいですか。
我妻委員長	はい。
鈴木委員	鳴子一栗の道の駅がありますけども、私の近くの農家の知り合い、同級生、先輩も含めて、あの周辺に加工でナメコとかキノコを作っている方が多いんです。もともとの販路は仙台市場だったんです。で、一年ずっと計画出荷で、全部コンピュータ管理でできるようなところでやっているの、計画出荷ができるということで立ち上げたんですけども、今、全量が道の駅に行っています。それでも足りないくらいになっていて、従業員が前に5人くらいしかいなかったのを今、15人に増やしてやっていますし、フル稼働しているようです。 そういうところも販路が大きくなれば、そういうふうに向くところもありますし、美里からもあちらに出している方もいますし。 実際、そういう部分はやっぱりそれだけの販路がそこにあるとなれば、どんどん出荷する方も増えてくるし。やっぱりそういう活性化施設に、なるべくしていただければ、これだけのことになっていけるのかなと。
山岸委員	そうすると、まず俺らがイメージしていた商工業者と農業生産者とのコラボだったり商品開発だったり、あるいは流通といったことをイメージして進めてきた感があるんだけど、こうして話をずっと聞いていると、地元の業者さん、あるいはそれなりの規模でやっている人たちは町内消費よりも町外、県外を向いている。それは独自にやっているんだよね、実際ね。 そうすると俺らの農商工連携というときには、じゃ、今やっているそういう業者さん、商工業者なり生産者の方々に町としてどういうバックアップなり支援を考えると、私しばらく前にもこういう提案をしたことがあるのだけれど、美里町で生産される野菜であれ商品であれ、例えば一番最初に提案したことがあるんだけど、イノアック、あそこ本社は宮城県じゃ

	ないんですよね。だけれども美里町の工場で作った商品に対して、メイドイン美里町とかのステッカーなんかを町で作って商品に張り付けるとかさ。それが美里町の名前を売ることにもなるし、ブランド化にもつながっていくんじゃないかなということを提案したことがあるんですよ。それがなかなか実践、実行されていません現実的に。 だから町で支援できるのはそれくらいなのかなと。予算的に考えたときにね。だって町の産業振興課は正直言ってプロじゃないです。職員ですからね。 むしろ業者さんのほうは完璧なプロで、取引先から何から情報をいっぱい集めて、それでいろいろ流通だとか商品開発とか独自にやっているからね。そういうことを考えたときに、常任委員会で農商工連携を活性化させるためには、こうして一生懸命にやっているんだけど、町に提案するのであれば具体的に美里町には現在こういう生産者がいます、こういう工業製品、開発しているところ、そこになにか美里町の名前を知らせるためのステッカーとかあるいは規格なんとか、要するにそういうのを発行する委員会などを例えば商工会の中に作って、認定制度だとか認証品だとか、そのくらいのことはやれるんでないかなと今、思うんだけど。 ま、その前にさっき言った問屋さんだとかそういう方々と一回、我々の考えている意見も言って。実際に今、営業をされている方々は常にアンテナを高くしてやっているから、彼らのほうがよっぽど情報を持っているはずです。 その辺を含めて意見交換などやればいいのかと今、思ったんだけどね。
我妻委員長	鎌田醤油屋さんの使っている豆なんかは、どこが主なんだろうね。 川敬さんは、米は地場産を使わないで、あっち側でしょう。娘さんが地元のひとめぼれを使ってこれから吟醸酒を始めると。小島ではさっき出たように無農薬の豆なんかを使ってやっている。 その辺の、ま、ブランドという言葉もあまり使いたくないけど、この前、我々が北海道でやったように、いかに地元、美里の近隣を含めてもいいかと思うけど、その特徴だろうね。ここだから作れる商品だよというのを追及できるところがあるのかどうかね。 端的に言って、うちの副議長なんかも豆を作って、この前も豆腐なんかも作っているけども。 どれくらい地元の材料を使っているのか、ちょっと気になったのね。 豆を作っているのは、今は転作で結構、増えているんだよね、農家は。
鈴木委員	はい。

	一応、北海道に次いで宮城県は全国第 2 位の大豆生産を誇るのだ。
我妻委員長	町内でも増えている。
鈴木委員	町内も増えていますし、その通りです。技術力も上がったので皆さん、収量もかなり上がってきていますし。やっと南郷地区にも追いつけるかなと。南郷地区は基盤整理事業が早かったのだ、小牛田地区はその部分、遅かった。
我妻委員長	その豆はどのように活用されているんだろうね。
鈴木委員	品種も多様に渡るので、市農協さんは納豆に向ける品種と味噌に向く部分と豆腐に向く部分で 3 種類の品種構成をしていますけど、小牛田に限って言えば生産者皆さんが作りやすい豆を作っていると言っていいかと。 販路を目的とした意図を持って生産しているという考えを持っている方は少ないと思っています。
山岸委員	作りやすい豆を作っていると。
我妻委員長	ま、転作目的だからね。
鈴木委員	転作だと収量に応じて補助金が出る部分もありますので、収量を取らないと、どうしても生産が継続できませんから。そういう意図を持って長くするためにはやっぱり反収の上がるもの、単価の高いものという具合に今まではなっていますね。
山岸委員	そうすると品種にこだわらないで、あくまでも収穫量を目的に。
鈴木委員	言わばそうですね。
山岸委員	だから補助金目的。
鈴木委員	はい。
山岸委員	となると、作った豆は品種にこだわらなければ限定されるよね。
鈴木委員	だいたい作っている豆は限定されています。
山岸委員	だよな。
鈴木委員	タチナガハという品種があるんですけど、たぶん、みどりの管内では約 7 割は占めると思います。小牛田で言えば面積で 90 パーセントぐらい。
山岸委員	今、言った豆は、用途としては。
鈴木委員	加工の部分。納豆でも醤油でもオールラウンドに。だから量的にもさばけるんでしょうけど。ミヤギシロメというのは豆腐に向く品種ですし、タンレイという小さい豆は納豆と。豆によっていろいろあります。
山岸委員	納豆が今、ほとんどが極小粒とか小粒だよな。あれって国産よりも圧倒的に外国産のほうが多いんでしょう。違うの、国産のほうが多いの。
鈴木委員	納豆の豆は日本産がほとんどだと思います。 ただ、国内産以外の豆でも極小というのは特殊な豆なので、3 ミリから

	5ミリぐらいの豆なんです。刈取り機械から選別まで全部、それ専用になってしまうので日本国内でしかあの品種は作っていません。極小とか小というのは、豆の種類も段階があるんですけども、言って悪いですけども一番ハネの部分で作っていると言ったら怒られますけども、そういうところの豆が納豆に向いて出荷されます。
我妻委員長	櫻井委員。
櫻井委員	前原さん、藤ヶ崎の武陽食品、あそこは前に元木さんが所長をやっていたこともあるんですけども、あそこは一手に中国からじゃないの。
鈴木委員	元木さんたちは今、荻埵で。
櫻井委員	あっちでやっているのね。
鈴木委員	遺伝子組み換えの納豆も、もちろん使っているかと思います。
櫻井委員	豆腐と納豆やっているね。
鈴木委員	それで、いろんな豆、黒豆の納豆、あとは青バタといった青い豆の納豆とか、さまざま作っているのが武陽にいた元木さん。
櫻井委員	息子さんと奥さんだね、やっているの。
鈴木委員	会社名をちょっと思い出せないんですけども。
我妻委員長	豆の加工のほう。
櫻井委員	あそこは、私が聞いた話だよ、よくわかんないけど、ほとんど中国から安いやつを。ほら、中国、ウナギもみんな安さ、食品。どっさり。聞いたことないですか。
前原委員	あそこは内情がわからないというか、正直。加工はあそこでやっているみたいなんですけど、大きい工場は松山にある。
山岸委員	武陽食品という会社はまだあるの。 （「ある」の声） 加工場が松山に。 （「大きい工場が」の声）
櫻井委員	一手に中国から大豆を輸入しているということは安いんだろうな。 （「原料」の声） 原料だね。
鈴木委員	たぶん中国は輸出できる量はまったくないと思うので。 （「ないのか」の声） 自国で消費して輸入国になっているかと思うので。アメリカからどんどん入っています。アメリカ、オーストラリア。
我妻委員長	さっき話が出た遺伝子の組み換えね、逆に今、遺伝子組み換えをしていないことを売り文句にして売っているのが多いんだよね。遺伝子組み換え

	はしていませんという表示が増えていますよね、納豆なんて特に。
櫻井委員	前に議会で渡辺採取場の社長さんと呼んで、遺伝子組み替えの研修がありましたよね。渡辺の社長さんは海外に行くとかかなりVIP待遇というのかな、大臣並みの扱いをしてもらっていると。 （「合併の前でないか」の声）
我妻委員長	消費者のほうは遺伝子組み換えとかしていない、それこそ安全だね、意識が高まってきているから。さっき出た小島の安部さんの例でないけども、目に見えるところで安全に生産された材料を使ったものというのが、あそこの売りだね。そういうのが一つのキーになるのかなと思うんだよね。 安けりゃいいというのでは、なかなか美里のブランドとして出せるものではないような気がするね。 市農協は一定の指導があってやっているようだけど、みどりの農協がないとすれば一つの、なんて言うのかな。さっきも出たけど、聞いてみないとわからないけども、くみあい醤油とか鎌田醤油さんがどこの材料を使っているのかね。 農協の営農指導するようなところが、地元の加工業と地元の農業生産者とをマッチングさせようという努力があるのかどうか。
藤田委員	今、委員長が言ったような、そういう形を支援していく体制が我々の役目だと思うんですよ。豆がどうのね、どこから誰がどうのというのは二の次だと思う。 やっぱり生産者に対してやる気を起こさせる、わが町のものを商品化して出していくのも一つの行政として、我々の委員会としても行政に伝えていってやる気を起こさせる、そういう支援をする調査をすべき場所がここだと思う。 びしっと提言していく、そういうことの中身だと私は思っているんですがね。
我妻委員長	地元の豆も結構、多い。それがどのように町内にある加工業の人とマッチングする、そういうのをやろうとしているのか。
藤田委員	やる気があるのかないのかわからないけど、そういうことを、やる気を起こさせて、増やしていったらわが町の商品として出してく。それがやっぱり一番基本だと思うよ。だから種屋さんなんかは大変重要なポストにいると思う。いいものを持っているわけだから、それはどんどん生産者に対してやってもらうような方向性を、行政は仕向けていくような対策を考えていくべき、まずそこだと。 やっぱりみんなやりたくて。それ以上の個人でやっている人はいるんだよ、さっき鈴木さん言ったような。調べてわかっているから、それこそ我々

	よりわかっていると思います。ただ、それ以上進まないわけだから。 それを進ませる、大きくしていく。そこは基本だから考えていかなければならないんでないの。
我妻委員長	今、言われたように、農協も町もその方向でやっていますよと言うんだったら今更ということになるし。
藤田委員	やっていないから、こういうことになっている。
我妻委員長	やっていなければ、やっぱりそのところを。町内産の農産物と町内の加工のセッティングをきちんと持っているかどうかだけど、持っていないならきちんと持つべきだろうと思う。
藤田委員	農商工連携でそこでやっていくべき。その検討をきちんと最初からもう一回見直すべきでないのかなと、話を聞いていてね、そこが大事なかなと思うんですけど。
我妻委員長	農協でそういうマッチングする場が作られるようなことは聞かない。 （「どうかな」の声） 農家個々の判断と。さっき豆の生産... はい、鈴木委員。
鈴木委員	まず一番、このごろ目立つのが松ヶ崎の法人化になったところが大豆生産を自分のところでして、それを今度、味噌加工に今年からかな、始めているようです。それこそ6次産業ですけども。 農協さん自体がおもな企業に、例えば働きかけをしていろいろ地元の豆を使って豆腐屋さんとかに行っているのではなくて、やはりそこは流通に乗って行くので、やはり問屋さんからまた間があって各小売店というか、そういうところにたぶん行っているかと思うので、小売店の方々の要望があればでしょうけども、たぶんそういうことはないのかなと思っています。 私も納豆を成澤さんとかいろいろ頼みますけども、聞くと地元の豆ではないようなお話。あと古川納豆さんとか古川の納豆屋さんに聞いても、いろんな豆が来ますと。ま、宮城県産の豆を使っているようですが、安くするのにはさっき言った大豆、組み換えのやつも使っていると。いろんな話をあまり教えてはくれないですけど、そういう話でしたね。
我妻委員長	はい、前原委員。
前原委員	そのとおりだと思うんです。 それで要は流通なわけですから、さっき出た話の中で転作の中で補助金を目的に大豆を作っていると。ま、一つですよ、スタートはね。その中で多様化してきているいろんな品種の豆を作るようになったと。それを今度どこに流れているかというのを調べてみるのも一つ方法なのかなと。 また逆に、今度は委員長が言った鎌田醤油屋さんなんかの加工業者がど

	この豆をどの部分で、ま、教えていただけるかどうかわかりませんがね。そういうのをちょっと調べてみて、単価的なものが折り合い付けばそれこそマッチングできるのかなと。机の上の話ですけども。 そういうのを調べるのも一つかなと思っている。
鈴木委員	ちょっと止めてもらっていいですか。
我妻委員長	はい。 ちょっと休憩します。
	休憩 14：09 再開 15：03
我妻委員長	再開します。 休憩中、豆の生産について議長から基本的な現状について報告いただいて勉強になりましたけども、それらも含めてさっきの豆とか中心に町内の農業生産物がどのように使われているのか、あるいはこれからの方向性としてそれらを使った商業、工業との連携をどのように考えていく必要があるのか。だいが農協の考え方がかなり大きなウエイトを占めているのかなと思いますが、そういう意味では前回も農協とか商工会とか意見交換の場を持ってはどうかと、そういうふうにも言われていましたので。 当面、そういう大きなところとの意見交換の場を作って、これまで4カ所やってきたのを踏まえながら、あるいは北海道の2町を視察したのを踏まえながらさらに討論を深めていくと。 おもにそんな方向で考えられるのかなと思いますけれど、いいですかね。 （「はい」の声） 当面は農協とのセッティング、意見交換の場を。年明け早々だね。年末では難しいでしょうから。そこでさっき言ったように町内の生産物の使われ方の現状、それをどのように農協として考えているのか。 はい、藤田委員。
藤田委員	その方向でいいと思います。 それについて、われわれ独自でやるのだったら産業振興課を交えて、通してやっていくとか、そういうふうに回していったほうが、どちらかと言えば農協を相手にするのであればね。産業振興課も入れた中で委員会として取り組んでいく。
我妻委員長	今、藤田委員から言われましたけど、この前の梨部会のように産業振興課を間に挟んでやったほうが、産業振興課にも意識を持ってもらうことになるし。

藤田委員	そういう意味でもいいのかなと、どうですかという話。
我妻委員長	そういう意味でもね。 セッティングは産業振興課を通じて農協の、どうなんですか、本店...
鈴木委員	営農部。
我妻委員長	営農部を中心ですね。 (「営農部だけでいいの」の声)
鈴木委員	流通系、経済部も入りますけど、ほとんど販売促進、そっちの営農部でもありますから。 (「情報なんかは」の声) もちろん持っていますし、動いている方々が各課でいろいろありますので。
我妻委員長	おもに豆とか麦とか町内で生産されている生産物が、どのように商品化して流通しているのか。それが今後はどのように活用されようとしているのか。できれば町内産のブランドなんかのつながりについてもどう考えられているのかとかね。 その辺について産業振興課からそういう目的で言ってもらって、むこうでどのような人たちが来るか、お任せしてね。こっち側から誰々ということではなくて。
鈴木委員	支店に対応する方も。小牛田支店なり南郷支店で営農部の方が、そこで対応される方がいるかもしれないし、本店だけで対応するかもしれないし。
我妻委員長	はっきり、ま、この前やったように意見交換、ざっくばらんな場にしてね、ああやれこうやれというものでなくてね。 (「そういうのを聞かせてもらおうと」の声) 意見交換の場で。 じゃ、年明けになりますけど、その辺の日程について産業振興課を通じてお願いするということで。1月半ば過ぎですか、ある程度の幅をもって。1月中旬以降、16日以降ですか。 (「はい」の声) 1月16日以降、1月中にそういった場を設定してもらおうようにすると。 (「はい」の声) それでは産業振興課のほうに伝えて、その場の設定をお願いします。 あと、そのほか確認しておきたいことは。 なければ閉めてよろしいですか。 (「はい」の声) じゃ、副委員長、お願いします。
山岸副委員長	いろいろ議論を結構したと思っております。

	まずは JA みどりのさんとの意見交換を来年 1 6 日以降にやるということで常任委員会を進めていきたいと思っております。話し合いをすればするほど非常に難しいなと印象を持ちましたし、町でできること、われわれ議員としてどのように、いくらかでも町の産業振興に役立てる施策を検討できるのかというのは非常に難しいと思っております。まさしく古くて新しい、新しく古い課題だとは思いますが、なんとか知恵を絞って町の振興につなげたいと思いますので、皆様のご協力をいただきながら今日の常任委員会を終了させていただきます。 大変、ご苦労さまでした。
	閉会

会議の経過を記載して相違ないことを証するため、ここに署名する。

平成 年 月 日

総務、産業、建設常任委員会

委員長